



27

「続」

戦争のない国に生まれ、好きな服を着て好きなものを食べ、明日を想像しながら眠りにつく。そんな毎日がどれほど尊いものかを、僕はときどき忘れてしまう。

忘れられる瞬間があるのは「平和」であることの証だ。けれど、そのありがたみを完全に忘れ去ってしまうのは、やはり違う気がする。今日は、僕が過去に経験した少し苦しい出来事と、まだ飲み込めずにいる感情について書こうと思う。

十年前の夏、僕は鹿児島・知覧ちらんを訪れた。

車を降りた瞬間、やわらかな風が頬を撫でた。広い駐車場にはゆったりとした空気が漂い、隣の運動場では子どもたちの声が響き、犬を連れて散歩する人の姿もあった。おだやかで、ここがかつて戦争と深く関わった場所だとは、まだ実感できなかった。

知覧特攻平和会館ちらんとつこうへいわかいかんの自動ドアを抜けると、外とは違う静けさが待っていた。冷房の涼しさよりも先に、ひんやりと重たい空気が肌にまとわりつく。

壁一面に並ぶ若い顔。

古い写真は祖父の家でも見たことがあったが、写るのはたいてい、髭を蓄え、真剣な表情をした「大人」だった。ここに並ぶのは、あどけなさを残す年頃の青年たち。やわ

らかい笑顔もあれば、決意を湛^{たた}えた瞳もある。モノクロ写真が今にも色づき、声が聞こえてきそうなほど、生き生きとした表情が目の前いっぱいに広がっていた。

ガラスケースに収められた便箋^{びんせん}には、心をそのまま映したかのような整った文字で、大切な人へのメッセージが綴^{つづり}られている。

「体に気をつけて」「また会いましょう」――。

そんな何気ない言葉が胸に突き刺さる。平常心を保とうとするものの、書き手の思いの強さが勝り、読んでいて想像が止まらない。脳裏に映像が立ち上がり、胸が詰まり、怖いとも嫌だとも言えぬ息苦しさを感じ、ついに僕は逃げるように館を出てしまった。

外には、特攻隊員たちが出撃までの時間を過ごした半地下の建物「三角兵舎^{さんかくへいしや}」が再現されていた。当初はそこも見学するつもりでいたが、入口に立っただけで足が動かない。中からは、外の熱気とは違う湿り気を含んだ空気が吹いてくる感じがした。一旦駐車場まで戻り、深呼吸をすると、「ここがいい」と思った。再び中へ行く選択肢もあったが、そのまま出発した。

帰りの車中、複雑な気持ちが渦巻いた。どこかに目を背^{そむ}けた感覚があったのだろう。あの年は「戦後七十年」と言われた年で、祖父が生前、平和活動に携わっていたこともあり、自分なりに思いを深めていた。この場所を訪れるには絶好の時期だった。けれど、実際にその場に立つと、戦争で犠牲になった人々が遺^{のこ}した思いを直視することができ

なかった。

その後、お楽しみとしてプランに入っていた店に立ち寄り、名産の地鶏「さつま知覧^{ちらん}どり」をいただいたが、自分にしては珍しく味がほとんど入ってこなかった。ぼんやりしているのに、心だけがざわざわと動き続けているようだった。あの日の感情は胸の奥にしまわれ、「あれで向き合えたのか」という問いが、今でもときどき顔を出す。

あれから十年。僕は今も平和の中で暮らしている。この夏は「戦後八十年」という言葉をよく耳にする。酷暑の東京で、体が鉛^{なまり}のように重く、ダウンする日もある。さっきも昼寝から目を覚ましたところだ。大空を見上げる夢を見ていた気がする。

亡くなった若き特攻隊員たちが願った未来は、きっと特別なものではなかった。

家族と囲む夕食。友とのたわいもない会話。本を読んだり、昼寝をしたり。

そのすべてが奪われてしまった。

そして、僕は今日、その続きを生きている。